

パネル報告 2

(大塚) それでは、続きまして、桜美林大学の館昭先生にお願いいたします。館先生は、アドミニストレーション研究科の研究科長をされておりました、また今年度から高等教育学会の学会長もされております。今、天野先生からもアメリカの動向の話が出てまいりましたが、その辺も踏まえて、また館先生は大学評価・学位授与機構で私と同僚だったということもありまして、その辺のコメントもいただけるかと思っております。

それでは、館先生、よろしくお願いいたします。

FD を日米の異同から考える

館 昭（桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科 研究科長）

こんにちは。それでは、時間も押していると思いますので、早速お話をさせていただきます。タイトルは自由に付けさせていただきましたのですが、FDを日米の異同、異なる点、同じ点から考えるということで、お話しさせていただきます。といっても全面的に展開するというよりも、ピンポイントでお話しさせていただきます。

FDを日米の異同から考える

京都大学高等教育研究開発推進センター 公開シンポジウム
「FDネットワークの展開と大学教育改革の方向性を問う」
パネル報告
2010年 9月 7日(火) 京都大学芝蘭会館
館 昭(桜美林大学)

1. 日本でFDとは

日本の状況を設置基準から見るということで、天野先生のお話にありましたように、FDについては設置基準で規程があります。大学院についても規程がありますが、大学の方で見ますと、1999年の設置基準で「当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究の実施に努めなければならない」とあります。これが2008年



になりますと、同じような文章ですが、「研修及び研究を実施するものとする」となります。これが努力義務から本格的な義務化になったということで、設置基準にFDという言葉があるわけではないのですが、これがFDのことだとして展開しているわけです。

その日本の設置基準を読むには、その直前の答申を、直前に限らないかもしれませんが、その背景としての中教審の答申、大学審議会の答申、そういう政府の答申を見るというこ

となのですが、そうした答中を見ますと、あの定義が出てくるようなものがあります。そこでは、「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称」だとしています。その意味するところは広範なのだけでも、具体的なものとしては、授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催ということで、極めて広いのだけれども、例は随分限られています。

最近の解説になりますと、同じように「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称」と。それから、「新任教員のための」という例、ここまでは全く同じで、変わっては困るのでしょうかけれども、なお書きがあります。「なお、大学設置基準等においては、こうした意味でのFDの実施を各大学に求めているが、FDの定義・内容は論者によって様々であり、単に授業内容・方法の改善のための研修に限らず、広く教育の改善、更には研究活動、社会貢献、管理運営に関わる教員団（ファカルティ）の職能開発の活動全般を指すものとしてFDの語を用いる場合もある」ということで、私の印象では日本のFDといわれているものはかなり広い。実は私の経験で言うと、これ以上に広く、新しいカリキュラムを開発するときも、それをFDと言っていたことも経験しています。そういう意味では、相当広いことを言っていると思います。

2. FD発祥の地では

それに対して、FDの発祥地ではというと、天野先生のお話でイギリスも言われましたが、イギリスではご存じのようにSD（Staff Development）という概念で言っていますので、われわれが導入したFDというのはAmerican Englishの方だと思われます。

そういう意味でアメリカの方を見ると、

設置基準

- 大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究の実施に努めなければならない。（「大学設置基準」第25条の2、1999）
- 大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。（「大学設置基準」第25条の3、2008）

a_tachi

3

ファカルティ・ディベロップメント 答申用語解説1

- 「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる。」
（中央教育審議会答申
「我が国の高等教育の将来像」、2005）

a_tachi

4

ファカルティ・ディベロップメント 答申用語解説2

「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる。なお、大学設置基準等においては、こうした意味でのFDの実施を各大学に求めているが、FDの定義・内容は論者によって様々であり、単に授業内容・方法の改善のための研修に限らず、広く教育の改善、更には研究活動、社会貢献、管理運営に関わる教員団の職能開発の活動全般を指すものとしてFDの語を用いる場合もある。」
（中央教育審議会答申 「学士課程教育の構築に向けて」、2008）

a_tachi

5

「高等教育辞典」

- James JF Forest & Kevin Kinser (2002) *Higher Education in the United States: An Encyclopedia*. ALB=CLIO: Santa Barbara, CA, p.212)
- 「ファカルティ・ディベロップメント」の項には、「（インストラクショナル・ディベロップメント）」

a_tachi

7

アメリカの見方も、先ほど吉永先生の論文の紹介もありましたが、いろいろな紹介の仕方があると思いますが、手元にある高等教育の百科事典、百科事典といってもこれは2冊で全部書いてあるもので、すごく便利なものです。そういう便利本を見てみますと、ファカルティ・ディベロップメントという項があるのですが、括弧してインストラクショナル・ディベロップメントと振られていました。

それで下手な訳をしてみますと、「ファカルティ・ディベロップメントは教員メンバーの専門職としてのプロフェッショナル・ディベロップメント能力の開発を意味する。この言葉は」、インストラクショナル・ディベロップメント、これは私は教授法の開発と勝手に訳しましたが、「つまり大学における教育（teaching）の向上と、その結果としての学生の学習の改善のために設計された活動と同義語である」とあります。要は、teachingの向上を図るものと定義されているということです。これも日本とアメリカというか、英語世界との差ということになりますが、日本では何でも「教育」と訳すのに対して、アメリカでは明らかにteachingとeducationは区別して使われています。teachingというのは教員と学生が、教える、向こうに学習行為が起こるという場面を想定して、その能力を高めるのだといっていると思います。そういう意味で、こここのところでteachingと原語を付けているのは、educationとは言っていないということです。

ところが、同時に、「時々」と書いてあるのです。「時々、大学はこの言葉を、インストラクショナルな役割だけでなく、教員の研究（リサーチ）やサービスに対する支援（サポート）と訓練（トレーニング）の意味で使うことがある」と。要するに、教員の研究やサービスの支援という意味で使う場合もあるのだと。「例えば、小規模なリベラルアーツ・カレッジでは、この言葉が研究補助金応募のセミナーに用いられている可能性がある。同様に、医学部では、この言葉が患者との対話や健康維持機関（HMOs）と一緒に活動するためのプログラムに使われるかもしれない。より広くは、サバティカル・リープ、研究支援や上級学位のための授業料免除がファカルティ・ディベロップメント活動と見なしえる。活動の性格にかかわらず、ファカルティ・ディベロップメントの目的は、教員個人と所属機関の利益のための、教員のエキスパート性と能力の増進にある。」

一つの事典で申し訳ないのですが、私の頭には幾つかあって、案外古いところには広い意味は載っていないのです。そういう意味では最近注目されたものなのかもしれませんが、そこから少し無理やりに帰納させていただきますと、確かに教育力の向上を超えた

FDはteaching力の開発

- ・「ファカルティ・ディベロップメントは教員メンバーの専門職としてのプロフェッショナル・ディベロップメント能力の開発を意味する。この言葉は、しばしばインストラクショナル・ディベロップメント(教授法の開発)、つまり大学における教育(teaching)の向上と、その結果としての学生の学習の改善のために設計された活動、と同義語である。」

a_tachi

8

より広い意味を持つことがある

- ・「時々、大学はこの言葉を、インストラクショナルな役割だけでなく、教員の研究(リサーチ)やサービスに対する支援(サポート)と訓練(トレーニング)の意味で使うことがある。例えば、小規模なリベラルアーツ・カレッジでは、この言葉が研究補助金応募法のセミナーに用いられている可能性がある。同様に、医学部では、この言葉が患者との対話や健康維持機関(HMOs)といっしょに活動するためのプログラムに使われるかもしれない。より広くは、サバティカル・リープ、研究支援や上級学位のための授業料免除がファカルティ・ディベロップメント活動と見なしえる。活動の性格にかかわらず、ファカルティ・ディベロップメントの目的は、教員個人と所属機関の利益のための、教員のエキスパート性と能力の増進にある。」

a_tachi

9

広い意味で使われる場合もあるのだと思います。しかし、狭義のファカルティ・ディベロップメントというのが、まず瞬間に彼らの頭には来るのではないかと思います。FDの定義を、狭義、広義という二つに分けて考えてみますと、アメリカの場合は、狭義の「teachingの能力向上」というイメージが日本よりは強いのではないかと思います。その立場からすれば、FDは教員の能力向上のためのプログラムを指しているのであって、先ほど私が勝手な例に挙げましたが、例えばカリキュラム開発の検討自体はFDではなく、検討に必要な知識や技能を修得するためのプログラムがあれば、それをFDと考えるべきだろうと思う次第です。

もう一つ、この事典すら古いのかもしれませんが、最近のアメリカの状況を見ました。これは皆さんの方が専門家ですので余計ご存じかと思います。そういう意味で、全く内容を知らない人間がWebページからの判断だけで紹介するものですので少し頼りないのですが、POD（Professional and Organizational Development Network in Higher Education）という組織が持っているWebサイトから少し知識を得てみようと思います。

この組織は、公称1800人のメンバーを持っているとされています。内訳はどういう人かという、ファカルティ&ティーチング・アシスタントのディベロッパー、それからファカルティ、アドミニストレーター、コンサルタント、ほかの高等教育の教授と学習に資する役割を遂行する者など、そういう意味では、先ほどの答申などでいくと、いわゆる専門家といわれる集団が集まっているようです。

ここで私が注目したのは、彼らは三つの用語を使っていたということです。ファカルティ・ディベロップメントとインストラクショナル・ディベロップメントとオーガニゼーション・ディベロップメントです。

ファカルティ・ディベロップメントは、この紹介によると、個人を対象としたプログラムを指しているとしています。1番はteacherとしてのファカルティ・メンバーの能力向上で、2番目は個人を対象とするのだけれども、学者としてのファカルティ・ディ

「辞典」の示すアメリカのFD

- 教育力の向上を越えた広い意味で使われる場合がある。
- しかし、狭義にしても広義にしても、それは教員の能力向上のためのプログラムを指しているのであって、例えばカリキュラム改革の検討自体はFDではなく、その検討に必要な知識や技法の修得ためのプログラムがそれに当たる。

a_tachi

10

PODの定義

- POD=Professional and Organizational Development Network in Higher Education
- 1800 members
- ファカルティ&TAディベロッパー、ファカルティ、アドミニストレーター、コンサルタント、他の高等教育の教授と学習に資する役割を遂行する者

a_tachi

11

3つの用語

- ファカルティ・ディベロップメント
- インストラクショナル・ディベロップメント
- オーガニゼーション・ディベロップメント

a_tachi

12

ベロップメントです。だから、そういう意味では研究能力の支援も入っているのでしょう。でも、第一にteacherとしてのファカルティ・ディベロップメントが出てきます。そして、個人に対するものだという事です。それから、3番目はperson、人としてのファカルティ・ディベロップメントということで、そういう意味では福利厚生に近づいてくるようなことまでも確かに概念としてはあるのかと思います。

どんなプログラム内容かというと、少し例を挙げないと分かりにくいと思ったので挙げましたが、これは先ほどのファカルティ・ディベロップメントです。teacherとしてのということで、クラスの組織の仕方、学生の評価の仕方、教室でのプレゼンの技能、質問及び他の授業設計やプレゼン／学生への助言、チュータリングのやり方、罰し方や管理などがあります。

それから、学者としてのというところで。これに対しては、キャリア計画、補助金申請、出版、委員会業務、管理業務、監督技能などの能力開発ということで、学者といっても大学人といった方がいいかもしれません。大学を運営できるようにすることも含まれたものです。

それから、人としてのというのは、健康管理、対人技能、ストレス・時間管理、出張訓練というようなものが挙がっていました。

次のインストラクショナル・ディベロップメントは、インスティテューションの改善のためのアプローチで、授業科目、カリキュラム、学生の学習に焦点づけられたプログラム。だから、個人の教授能力というよりは、これはカリキュラム開発ですね。インストラクターは、インストラクショナル・デザインの専門家と一緒に、授業科目のコース開発をすると、そういうものだと。それで、授業科目が学科や大学の教育目的に最大限に適合するように開発を支援したり、評価したりするものだと説明されていました。

もう一つのオーガニゼーショナル・ディベロップメントです。これは先ほどの話で出てきたODとは違います。オーバー・ドクターではなくて、オーガニゼーショナル・ディベロップメントですが、教育効果の最大化のための機関の組織構造と構成要素に焦点化とあ

ファカルティ・ディベロップメント

- ファカルティ個人を対象としたプログラムを指す。
- 一番は教員 (teacher) としてのファカルティ・メンバー
- 二番目には、学者 (scholar and professional) としてのファカルティ・メンバー
- 三番目は人 (person) としてのファカルティ・メンバー

a_tachi

13

プログラム内容の例

- クラスの組織、学生の評価、教室でのプレゼン技能、質問及び他の授業設計やプレゼン／学生への助言、チューターリング、懲罰方針や管理
- キャリア計画、補助金申請・出版・委員会業務・管理業務・監督技能などの職能開発
- 健康管理、対人技能、ストレス・時間管理、主張訓練

a_tachi

14

インストラクショナル・ディベロップメント

- インスティテューションの改善のためのアプローチで、授業科目、カリキュラム、学生の学習に焦点づけられたプログラム
- インストラクターは、インストラクショナル・デザイン専門家とともに、授業科目開発チームのメンバー
- 授業科目が学科や大学の教育目的に最大限に適合するよう開発を支援、評価

a_tachi

15

ります。何か抽象的でどきっとしますが、いわれている内容は、アメリカの場合は、組織をこのように運営できるのは、どうもアドミニストレーターだけのようでして、アドミニストレーターの管理能力を高めることを、どうもオーガニゼーショナル・ディベロップメントと、この組織は定義しているということです。そういう意味で、学科長・学部長、意思決定者の管理能力の開発なのだと。授業における授業法、教員の雇用や昇進法、学生の入学や卒業に影響する決定、教員の評価と報奨、改革の準備、自己の退職を含むなどとわざわざ書いてありましたが。教員配置とか、組合化・分化・専門化の影響など、その辺にいくと少しぼかして、意味が不明なところもあるのですが、組合対策なのかもしれません。そういう能力をつけるということを言っているののかもしれません。

オーガニゼーショナル・ディベロップメント

- 教育効果の最大化のため、機関の組織構造と構成要素に焦点化
- 学科長・学部長、意思決定者の管理能力の開発
- 授業における教授法、教員の雇用や昇進法、学生の入学や卒業に影響する決定、教員の評価と報奨、改革の準備(自己の退職を含む)、教員配置、組合化・分化・専門化の影響

a_tachi

15

3. 日米の異同からの示唆

私の話は20分かかっていないかもしれませんが、そういうことから、日本とアメリカの異同を考えますと、何が異なるかというと、結局、最初に見つけたように同じ面が多い。日本でもアメリカでも、関連するFDといわれているものの活動は広そうだと。しかし、アメリカでは異なる機能には異なる用語が使われだしているようです。そういう意味で、確かに先ほどの辞書の方の定義のインストラクショナル・ディベロップメントは、専門職団体の方でいくと、teacherとしてのファカルティ・ディベロップメントに当たるように読めますし、次のインストラクショナル・ディベロップメントの方がカリキュラム開発の方に読めます。アメリカではいい意味でも悪い意味でも、答申が出て、そこで用語を統一するというようなことはありませんので、そういう状態だと思います。

にもかかわらず、大きく総じてみれば、異なる機能に対して異なる言葉を使って、目的をはっきりさせて取り組んでいるのではないかと。そういう意味で、日本でも異なる機能には異なる用語を用いていった方が、より目的に即した活動ができるのではないかと思います。かつ、にもかかわらず、広い意味をどこでも持つのですが、最も本来的な意味は、やはり教員個人のteaching能力の専門的なサポートということです。そういう意味では、アメリカではそういう狭い意味のFDを受けている人は、大学の教員全員ではありません。得意ではない方だけです。吉永先生の紹介にあったでしょうけれども、そういうセンターは全員に受けろと言っているわけではなくて、そういう必要がある人にきちんとteachingの訓練をする機関です。

それから、イギリスのSDというのも、イギリスでは2期にわたって大学の拡張、マス化、

異同と示唆

- 日本でもアメリカでも関連の活動は多様
- アメリカでは、異なる機能には異なる用語
- 日本でも、異なる機能には異なる用語を用いたほうが、より目的に即した活動ができる。
- FDのもっとも本来の意味である、教員個人のteaching能力養成の専門的なサポート、を欠いてはならない。

a_tachi

16

ロビンズ報告と、最近のものは、デアリング・レポートですね、それとかかわっています。大きくみて、ロビンズ報告で、高等教育を拡大して、ポリテク卒まで間接的ですが学位を取れるようにしたという大きな改革が60年代にあって、そのときに新任教員に対してやったところから、私の認識ではSDが始まっています。それから、今度のデアリング・レポートで大幅に高等教育を拡大すると。これに合わせて、今言ったティーチング・センターというものを位置付けたと私は思っております。

そういう意味で、最後に繰り返しですが、提言までということがありましたので、今後やっていく場合は、用語を整理しながら必要なものを、大塚先生やセンター長の定義にもありましたが、用語を整理するということは、実は言葉だけの問題だけでなく、中身が何かということもありますし、そういうところを気にしながら、異なる機能に異なる用語を用い、もう一つ、最低限のところは本来の意味である授業が下手な先生を何とか支えてあげたらいいのだが、と思う次第です。拙い報告ではありましたが、これで終わらせていただきます。どうも失礼いたしました（拍手）。

（大塚） 舘先生、どうもありがとうございました。日米の異同ということで、FDの言葉をもう一度基本から学び直す機会を与えていただきました。